共同運営部門：臨床検査センター　・　輸血・細胞治療センター

＜組織・構成員＞

－臨床検査センター－

部長：髙野徹　　精度管理者：髙野徹

部門長：花田浩之　　部門長代理：山﨑功次

臨床検査技師（総数）：39名（非常勤2名,臨時嘱託員2名含む）

－輸血・細胞治療センター－

部長：釜江　剛

担当技師：4名（他部門と兼務者含む）

＜基本方針・目標＞

《基本方針》

・常に患者様の立場に立って考え行動します。

・精度の向上を図り、良質な検査結果を提供します。

・業務・経営改善に努力し効率のよい検査を行います。

《目標》

・検査の迅速化および効率的な運用を行い、待ち時間の短縮に貢献する。

・精度管理ならびに検査技術のさらなる向上を目指す。

・チーム医療を目指した多職種間の交流と技術習得のための講習会を開催する。

・予防医学を含めた地域医療の体制強化に貢献する。

・研修体制を確立させ有機的な人事交流を実践する。

・耐用年数を見据えた機器更新の円滑導入に向けた計画の策定。

・業務負担の不均等を改善し、残業時間を 20%削減する。

・コンプライアンスの推進のため業務マニュアルを整備する。

＜各部門の概要及び実績＞

《検体（生化学、免疫、血液、一般）検査》

昨年に引き続き、他部門との兼務が可能な人員育成に取り組んだ。 全体の検査依頼件数は181,021件で、前年度比1.4％の減少となった。内訳としては、外来が2.8％増加した一方、入院は7.0％減少している。依頼項目数は2,367,067項目で、昨年度から42,557項目減少した。特に入院患者において29,786項目の減少がみられ、今年度から取り組んでいる検査項目数削減の効果が表れていると考えられた。

外部委託検査の委託費は104,751,569円で、SRLへの支払いだけで1億円を超えた。その他の委託業者への支払いは3,732,311円であった。これらの増加は、昨年同様、遺伝子関連検査の増加が要因と考えられる。

【今年度の成果と反省点】

月間依頼件数が200件以下の院内検査項目にかかる試薬代は年間で4,000万円を超えており、これらの項目を外部委託することで経費削減を図る運用を、臨床の先生方のご協力のもと構築した。その結果、概算で約2,000万円の経費節減が見込まれている。この取り組みは2026年度から開始される予定である。

【来年度への抱負】

臨床検査部門では、検体検査の一元化に伴う分析装置の統廃合を進め、機器更新にかかる経費削減や動線の効率化など、業務改善に取り組んでいる。生化学検査の削減やパスの検査項目の見直し、検査依頼数が少ない項目の外部委託化など、検体検査にかかるコスト削減の取り組みは今後も継続する一方で、院内で必要とされる検査については積極的に取り込み、診療に資する検査体制を維持したいと考えている。2026年度には、HCV抗原・抗体同時測定試薬など、肝炎治療に有益と考えられる試薬を院内測定へ移行し、病院全体の収益向上に寄与する検査体制の構築を目指す。今後もさらなる業務改革を推進し、検査業務の集約化を通じて病院経営に貢献していく所存である。

《検査情報室》

臨床側の要望に迅速に対応するために検査情報を一元管理している。臨床研究検体や治験検体の対応や新規検査項目の導入、critical value(以下：パニック値)報告など、様々な臨床側の要望に迅速に対応している。

【今年度の成果と反省点】

今年度の電子カルテ新規導入検査は、臨床側からの要望も含めて11項目であった。当科から報告したパニック値報告件数は509件で、全件を直接医師に報告できた。次に、治験検体の処理件数は206件、正式に依頼された臨床研究検体の保管件数は169件であった。また下半期からは、遺伝子外来や腎臓内科、小児科からの依頼で新たな遺伝子検査会社3社への検査出検が開始された。

【来年度への抱負】

昨年度より未保険項目の出検を削減する取り組みをおこなった結果、未保険項目での病院からの持ち出しはなかった。未保険項目の出検については、混合診療になる場合は病院長・理事長の許可制または各診療科の研究費から支出することになっている。情報室では、この運用を遵守するため、電子カルテでの検査依頼方法を見直すと共に、臨

床側にとっても項目検索が容易になるようリスト化して掲示するなど改善に取り組む。

《細菌検査》

昨年度から引き続いていた、複数の病棟にわたるVREのアウトブレイクは、本年度8月をもって終息宣言が出された。

また、昨年度より開始した、夜間・休日に陽性となった血液培養のグラム染色結果を報告する体制に関しては、時間外でも電子カルテに結果を記載することにした。これにより、確実に臨床に報告することが出来るようになった。

【今年度の成果と反省点】

昨年度から続くVREのアウトブレイクについて、本年度も保健所の指導の下、対象となった2病棟入院中の全入院患者に対する、2週間ごとの監視培養を継続した。その後、各病棟とも院内発生の新規患者が認められなかったため、監視培養検査は終了となった。本年度8月をもって終息宣言が出された。

約2年にわたり続いた監視培養は終了したが、引き続きリスクの高い患者の入院時の監視培養は継続されることとなった。

また、本年度は大阪・関西万博の開催に伴い、海外在住の患者の受け入れが想定されたため、耐性菌の持込を速やかに発見できるよう、各種スクリーニング培地を通常より多めに準備した。幸い、感染対策上大きな問題となりうる耐性菌は検出されなかった。

夜間・休日などの時間外に陽性となった血液培養のグラム染色の結果報告については、開始当初は普段担当していない業務に対する不安の声も聞かれたが、細菌検査担当者が、夜勤・日勤者の鏡検した結果の確認を行い、それについてのアドバイスを行うことにより、自信を持ってグラム染色結果を報告出来るようになった。

【来年度への抱負】

万博は終了したが、外国人患者の受け入れを積極的に行っていく病院として、常に耐性菌の情報に注意を払い、検査方法の拡充に取り組んでいきたいと考える。

《生理機能検査》

業務を円滑に進めるために多領域の検査を兼務できるよう人員育成を進めている。また、日本超音波検査学会が制定する「超音波検査室の精度認定制度」で、腹部、心臓、血管、体表、健診の5領域すべてに関しA評価判定による精度認定を取得し、より良質な検査報告体制を整えている。

救命センターの検査も受け入れることで、より重症度が高い患者に対する迅速な治療介入にも寄与している。

産科での胎児エコー検査や耳鼻科での聴力検査など検査室以外での業務を行い、タスクシフト/シェアにも貢献している。

【今年度の成果と反省点】

急性期脳梗塞患者に対する、長時間心電図検査や心エコー検査におけるマイクロバブル検査の対応を柔軟に対応し、ICM植え込みまでシームレスな対応の手助けができた。

アブレーション対象患者の増加のため循環器科から7日間ホルター心電図検査枠増加の要望に対して、昨年度の総件数588件から889件へ増加した。今年度は更に枠を増やして対応している。

人材育成によって、多領域の検査を行える技師が配置する事ができ、当日緊急検査が必要な患者に対して柔軟に対応できるようになったが、臨床側からの要望に対応できない場面もあり今後の課題である。

【来年度への抱負】

人員不足のために中断していたCPX検査への介入を開始し多種職との連携を進めていきたい。また、心エコー検査の需要増加に対し計測項目や病棟患者の検査対応見直しを行い、検査時間を短縮し外来検査枠の拡大とスタッフの負担軽減も目指し業務効率化を実現したい。

対応年数超過装置の更新に向け、資材のコストを含めた提案を行い、円滑な導入を目指します。

《輸血・細胞治療センター》

2025年度の各製剤の使用数は昨年度より赤血球製剤、新鮮凍結血漿、血小板製剤は減少し、アルブミン製剤は増加した。輸血検査項目の血液型検査は増加し、その他は減少した。

【今年度の成果と反省点】

赤血球製剤の廃棄率は昨年度と同じ0.1％であった。出庫先での保管体制の不備、ヒューマンエラーによる廃棄も昨年度と変わらず発生しており、より血液製剤の適正管理の呼びかけが必要である。

また造血幹細胞移植後の血液型変更についての取り決めがなかったため、輸血マニュアルを改定して運用を開始した。

【来年度への抱負】

廃棄製剤の減少を継続していく。血液製剤の適正利用についても整備する。医師のタスクシフトにも協力していき

たい。

＜認定検査士＞

・超音波検査士
（消化器領域） 4名、(循環器領域） 6名、
（表在領域） 3名、(泌尿器領域） 2名、
（血管領域） 1名、(健診領域） 2名
・血管診療技師 1名
・日本睡眠学会専門検査技師 1名
・細胞検査士 1名、(日本資格） 1名
・細胞検査士 1名、(国際資格） 1名
・認定血液検査技師 2名
・骨髄検査技師 1名
・認定輸血検査技師 1名
・認定サイトメトリー技術者 1名
・細胞治療認定管理師 2名
・救命検査認定技師 2名
・緊急臨床検査士 4名
・心電図検定1級 3名
・心電図検定2級 7名
・臨床病理同学院 二級臨床病理技術士(細菌） 2名
・循環器病予防療養指導士 3名
・未病専門指導師 1名
・POCTコーディネーター 2名
・大阪府肝炎医療コーディネーター 2名
・特定化学物質四アルキル鉛等作業主任者 2名
・毒物劇物取扱主任者 1名
・中級バイオ技術者 1名
・第2種ME技術力検定 1名
・衛生管理者1種 1名
・臨地実習指導者 2名